

さなぎの時代に基礎固め



世の中というものを初めて知ったのが高校時代だったという吉田慎一さん

学した。

中学では体操部に所属。東京オリンピックの前で体操が花形だった。鉄棒、ゆか、跳馬(うちま)なんでもこなし、市内の大会にも出場した。

校舎と校舎の間の渡り廊下を、平家物語を暗唱しながら歩く国語の先生がいた。ドイツ語ばかり話す音楽の先生がいた。「新鮮で知的な刺激にあふれていた」と高校時代を振り返るのは、テレビ朝日ホールディングス社長の吉田慎一さん(66、1968年卒)だ。

少年時代は家の近くの利根川(とねがわ)でアユやハヤを捕ったり、河原のやぶで冒險ごっこをしたりして過ごした。全く勉強しないことを心配した両親のすすめで、群馬大学教育学部附属中学校を受験、進

高校では知的な世界にあこがれ、文化系の部活へ。生物部、詩吟部、社会科学研究部とかけ持ちする。本が好きで、仲間と文学サークルもつくった。最も衝撃を受けたのが、日本政治を分析して戦後の政治学を確立した政治思想史学者の丸山眞男(まるやま しんお)の本だった。政治学を学びたいと、東京大学法

学部に進んだ。大学では政治学に没頭。政治学者になろうかと考えていた時、新聞記者の友人の取材に同行する機会があった。いろいろな人の人生を聞くことができる仕事だと知り、

「最高の職業だ」と、朝日新聞社に入社した。主に政治部で取材し、編集局長 役員などを務めた。「高校時代に引き出してもらった好奇心が仕事の原動力になっている」

東京大学大学院薬学系研究科教授の船津高志さん(58、1977年卒)は、生命とは何かをテーマに、生物のしくみを光学顕微鏡を使って分子レベルで調べている。分子から得た情報を積み重ねる地道な研究だ。

科学が好きなき子どもだった。恐竜の図鑑ならどれだけ長い時間見ても飽きなかった。小学生の時は、東京・上野(うぶの)の国立科学博物館に行くのが休みの楽しみだった。

ただ、高校生の時は将来が見えなかった。剣道部で楽しく過ごしたが、ほかになんか熱中したわけではなかった。目標はなかったが、可能性をせばめるのはいやで、勉強した。

早稲田大学理工学部物理学科に進学。生命を物理で理解する学問にひかれ、研究室に残った。初めて自分の目で見た分子の様子は、今でも頭の中に焼き付いている。

「今があるのは、さなぎだった高校時代の基礎固めのおかげ。準備をしていけば急に見えるものがある」



「剣道部の仲間は今も大切な友人」と話す船津高志さん